HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ステイトとネイション（9）：近代国民国家と世界経済の政治経済学
Author(s)	佐々木, 隆生; Sasaki, Takao
Description	ナショナリズムは自己完結しえないイデオロギーであるにもかかわらず、近代社会に支配的な力を及ぼしてきた．それは、人民の自由の実現という原基的特徴をもつが、人民の共同体としてネイションが観念されることから、個人の共同体への溶解、アイデンティティー･ポリティックス、反知性主義、排他性などを纏う傾向を有する．ステイトとしての国家と産業社会、さらにそれらを基礎とする国際関係は、このようなナショナリズムを構造的に再生産し、その中でアイデンティティー･ポリティックスが有効に作用する条件と環境が存在するときには戦争や殺戮が生じる．だが、近代の歴史的発展が内包する普遍性やネイションやエスニシティーを超えるシンボル体系の存在などは、アイデンティティー･ポリティックス抑制の可能性をもたらす．現代社会は常にコンドルセとヘルダーの、あるいは「歴史の終焉」と「文明の衝突」の間の混沌を本質的に内包する．
Citation	經濟學研究, 54(3), 1-22
Issue Date	2004-12-09
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/5266
Type	departmental bulletin paper
File Information	ES_v54(3)_01.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

経済学研究 *54−3*
北海道大学 2004. 12

ステイトとネイション（9）

――近代国民国家と世界経済の政治経済学――

佐々木 隆生

目 次

はじめに
第Ⅰ部 リヴァイアサンと市民社会
第Ⅱ部 ジクラトの崩壊の後に
§1．ネイションのプロブレマティーク
§2．ネイションという迷路
§3．ナショナル・アイデンティティーの近代性
§4．ナショナル・アイデンティティーの本源的・自然的性格
（以上，前号）
§5．ネイションとアイデンティティー・ポリティックス
イデオロギーとしてのナショナリズムの曖昧さ
ナショナリズムの原基的特徴とその転回
転回が孕む原基的特徴の否定
アイデンティティー・ポリティックスの諸契機
ナショナリズムの位置（以上本号）
第Ⅲ部 世界経済とステイト・システムの浸食

§5．ナショナリズムとアイデンティティー・ポリティックス

イデオロギーとしてのナショナリズムの曖昧さ

ナショナル・アイデンティティーが確かにあることや，その起源と性格が理解されたとしても，直ちにナショナリズムが前面にたつような政治的運動や思想の形成を自明のものとして説くことはできない。前に触れたように[1]，人々のアイデンティティーは複数のアイデンティティーの束として存在し，したがって複数のナショナル・アイデンティティーを持つ場合があるからである。事実，多くの，というよりも圧倒的な数の「国民国家」が複数のエスニック・グループを内包する現実が存在するにもかかわらず，分離主義的なエスノナショナリズムが優位を占めるエスニック・グループはむしろ少数にとどまっている。

ナショナリズムそれ自体を考察してみても，あるナショナル・アイデンティティーから自然に，もしくは必然的にある特定のナショナリズムが生まれるとは決して言いがたい。何よりも，ベネディクト・アンダーソンがナショナリズムのパラドックスの1つとして指摘するように，ナショナリズムはその政治的影響力の圧倒的なすごさに比して，余りに「哲学的に貧困で支離滅裂[2]」であり，イデオロギーとしては包括的で明確な教義を形成しえない曖昧なものでしかないからである。

そもそも，ナショナル・アイデンティティーが存在・持続するとしても，種々のアイデンティティーが様々なイデオロギーと結合しうるように，ナショナル・アイデンティティーは過去互いに対立しさえする様々なイデオロギーと結合

1）前稿「§2．ネイションという迷路」，の「ナショナル・アイデンティティーの謎」。

2）Anderson（1883），p.14（邦訳，p.15）.

し，ナショナリズムもまた一般的には普遍的な政治思想や種々のイデオロギーと結合して存在してきた。

ここで言う「普遍」とは，特定の地方や国家，あるいはエスニック集団を超えた価値や理念，そして政治的原理として機能しうることを指すが，普遍的価値・理念・イデオロギーとてユニークではありえず，相対立する諸思想・運動が存在することは言うまでも無い。民主主義，資本主義，社会主義などの他にも，「神聖同盟」に見られるように君主制すら普遍的価値を担った場合もあれば，「イスラム原理主義」のような宗教を基盤とする運動もまたネイションを超えた普遍的価値・イデオロギーと言えるからである。

ナショナル・アイデンティティーを動員しての思想と政治的運動，あるいはナショナリズムの思想と政治的運動が，他のイデオロギーと結合せず，それ自体がバーガーの言う「コスモス」と「ノモス」[3]を含んで世俗的宗教として自立するような場合，言い換えれば「純粋型」として展開される場合は稀有である。それは，独立・統一の達成なり「民族の危機」に際して一時的に機能しえたとしても持続しえない。「民族と祖国」を「唯一の信条」として，ゴビノー（Gobineau, Comte Joseph Arthur de）に見られる特殊な反ユダヤ主義的，人種主義的なナショナリズムを主張したヒトラーのナチスがその典型例であり，また，「反資本主義・反自由主義・反共産主義」という否定的スローガンと「八紘一宇」という「国体論」イデオロギーが結合した「超国家主義（ウルトラ・ナショナリズム）」もそうである。ユーゴスラヴィアからのクロアチアの独立を牽引し，またそれらに対抗したセルビアのナショナリズムにも同じことが言える。

3）Berger（1990[1967]）は，客体化されたシンボル体系が社会的規範を形成するだけでなく，包括的な世界の解釈を導くことを指摘し，そこに宗教の意味を見出している。

しかも，それらのイデオロギーがいかにして生成したのかという問題は後に触れることにして，そのようなイデオロギー支配の下でもなお，実践にあって人々を説得する合理性が，つまりその時代が直面する普遍的課題への回答が必要とされることに注意しておかなければならない。大戦末期，沖縄へ水上特攻を行った戦艦「大和」の青年士官の間の論戦はそのことをよく示している。吉田満によれば，「必敗」が予見できる意味無き特攻作戦[4]に出撃するに際して，海軍兵学校出身士官が職業軍人としての使命に基いて「国ノタメ，君ノタメニ死ヌ　ソレデイイジャナイカ」とする見解をもつのに対して，学徒出身士官は「俺ノ死，俺ノ生命，マタ日本全体ノ敗北，ソレヲ更ニ一般的ナ，普遍的ナ，何カ価値トイウヨウナモノニ結ビ附ケタイノダ」という意見が出された。そのような艦上での論戦は，「ケップガン（ガンルーム，士官室の長）」として青年士官を率いた臼淵磐大尉の「日本ハ進歩トイウコトヲ軽ンジ過スギタ・・・本当ノ進歩ヲ忘レテイタ　敗レテ目覚メル，ソレ以外ニドウシテ日本ガ救ワレルカ　今目覚メズシテイツ救ワレルカ　俺タチハソノ先導ニナルノダ　日本ノ新生ニサキガケテ散ル　マサニ本望ジャナイカ」という言葉によって収まった，という[5]。

また，大戦開始後にナチス経済相のフンク（Funk, W.）が提起した「ヨーロッパ経済新秩序（Wirtscaftliche Neuordnung Europas）」は，ナチスによる非ドイツ人の搾取を隠蔽し合理化するものであったにせよ，ある現実性を帯びていた。ケインズや保守的なロンドン『エコ

4）「天」号作戦と命名された大和以下の水上艦艇による沖縄特攻については，高木惣吉（1949）は「制空権を失ったその頃となっては全く無意義」と大本営海軍部で見ていたことを指摘し（p.142），千早正隆（1995[1982]）は，「成功の算がほとんどない」ことが明らかであり，「突入作戦自体がすでに純作戦というより精神的なもので」，「帝国海軍の伝統に生きるためだけに，死地にむかった」と評している（pp.333-336）。

5）吉田満（1974[1949]），pp. 326-327。

ノミスト』誌でさえ，それは「自由放任」が過去のものとなっている現実を直視したものであると評価したのである。フンクの提案は，やがて連合国が，大西洋憲章と米英相互援助協定に基づいて戦後の国際経済関係を構築する交渉を経て，国際通貨基金（IMF）や国際貿易機構（ITO）の形で対案を提出するべきアジェンダの存在を示していた[6)]。同じように，「八紘一宇」や「大東亜共栄圏」というスローガンも，米･英･蘭からの植民地解放という側面なしには一定の支持を東南アジアにおいて受けることは到底なかったであろう。それもまた，連合国がやがて取り組むべきアジェンダを示すものであった。

民主主義と自由市場経済という「普遍的」イデオロギー自体をナショナル・アイデンティティーとするアメリカ合衆国，あるいは「共産主義の祖国」としてのかつてのソ連は例外に属する[7)]。それらは，いずれもアメリカとロシアという特殊な条件の中に誕生したが，いずれもまた外に向かって輸出可能なイデオロギーをナショナル・アイデンティティーとし，独自の憲法それ自体がアイデンティティーを支えるシンボルをなした。そのかわりにアメリカとソ連の場合には，「普遍国家」としてのナショナルなアイデンティティー・ポリティックスが生まれる。ソ連では，「反革命」というレッテルによって反対派の粛清や抑圧が正当化され，対外的には「共産主義の祖国」としての特殊な地位に基づく外交が展開され，そして，アメリカの場合，それは，邪悪で堕落したヨーロッパを隔離する「孤立主義」と自由と民主主義のための「十字軍」的行動の両極の政治を導く。

ナショナリズムは，つまるところネイションの「統一・独立と利益と栄光」を目的として，種々の普遍的イデオロギーと結合して多様な形態で実存する。多様性の第１の契機は，ナショナル・アイデンティティー自体の多様性にある。ナショナル・アイデンティティーは，変化・変容を遂げるばかりでなく，地域，階級，階層，世代など種々の帰属集団にあって異なりうる。畿内と東北の農民の間で異なれば，真言宗徒とある神社の氏子の間，企業に勤務する者と職業軍人の間でも異なる。等しく「イギリス人 the British」であるという認識をもつにしてもスコットランドと北アイルランド，イングランド，ウェールズの住民では異なり，ハイ・チャーチ，ロウ・チャーチ，長老派教会など教会所属によっても異なりうる。「尊王道」と「武士道」のいずれに重きを置くかによって，また「神道」と「神仏習合」をいかにとるかによって，あるいは「シャルルマーニュ」，「ユーグ・カペー」，「大革命」を歴史の中にどのように位置づけるかによってナショナル・アイデンティティーは異なる。シンボルも確固としたものではありえない。「日の丸」はアメリカの沖縄占領統治に対する抵抗を支えるシンボルとも，また「対米従属」や「琉球処分」のシンボルともなる。地域，階級，階層の相違などはそうしたナショナル・アイデンティティーの多様性を育む。

多様性の第２の契機は，ナショナル・アイデンティティーが多様なイデオロギーと結合することにある。ナショナリズムは通常種々の政治的思想なり運動，たとえば絶対主義，議会主義，民主主義，共産主義，ファシズムなどと結合する。アラブ地域のナショナリズムはトルコからの諸王国の独立という形態でも，またナセルがイニシャティヴをとったアラブ・ナショナリズムという形態でも，さらにアラブ原理主義というイデオロギーと結合した形態でも展開しうる。

かくして，イタリアの統一と独立を等しく望みながら，ブォナルローティ（Buonarroti, G），マッツィーニ，カブール（Cavour, C.V. conte di），ガリバルディ（Garibaldi, G.）の理想は異なる。伊藤博文や山縣有朋の「元老」が抱いたナショナリズム，福沢諭吉の文明論に基づくナショナリズム，三宅雪嶺の「国粋主義」，民

6）この問題については，佐々木隆生（1986），（1987）などで触れておいた。参照されたい。
7）アメリカのナショナリズムについては，古矢旬（2002）が深い考察を与えている。

権派の愛国主義，徳富蘇峰の「平民主義」，そして井上哲次郎の「国体論」らにも同じことが言える。それは，ナショナリズムが「純粋型」となる場合にも言える。どのようなシンボルを中核に置いてナショナル・アイデンティティーをもつのか，また「民族と祖国の栄光」をどのように解釈するのかによってナショナリズムは種々の形態をとりうるからである。そして，そういった相違は主唱者や主唱団体の社会的基盤などによって左右される。ナチスと他の極右の相違やナチス自体の変化，大川周明と北一輝，さらに玄洋社系右翼などの違いを考察すればよい。

これに関連して，ナショナル・アイデンティティーを背景なり基礎とする思想や運動が排外主義やエスノセントリズムに必ずしも結合するとは言えないことにも注意しておこう。自国の「国民統合」を「欧化」や「民主主義」，「社会主義」など外界との接触から得られた価値と思想や西欧文明とそれが生み出した規範・制度を導入することによって成し遂げようとする試みは歴史の中で再三追求されてきた。ティルジット和約後のプロイセンのシュタイン−ハルデンベルク改革，日本の明治維新とその後の富国強兵策，清仏戦争・日清戦争を契機とした康有為らの変法運動などは19世紀におけるその典型例であり，20世紀の植民地独立運動もまたそうした性格を強くもっていた。

ナショナル・アイデンティティーなりエスニック・アイデンティティーから直ちにナショナリズムを導くのは難しく，またナショナリズムの主張内容はあまりに多様である。しかも，ナショナリズムはネイションの独立・統一と栄光を求める共通の特徴をもつにしてもユニークな思想内容をもつわけではない。

ナショナリズムの原基的特徴とその転回

それでは，ナショナリズムの昂揚やナショナル・アイデンティティーに基づくアイデンティティー・ポリティックスはどのようにして生成するのであろうか。あるいは，ナショナル・アイデンティティーに基づく政治的価値選択を優先させるような状況とはどのようにして生まれるのであろうか。無論，そのような考察を包括的に成し遂げるには，近代以後の「民族紛争」や種々の「ナショナリズム台頭」の膨大な例をつぶさに観察しなければならない。ここでは，これまでの考察を前提にしながら，幾つかの典型的状況を例証にとり，無謀かもしれないが，大雑把なスケッチを行うとしよう。

何よりもはじめに確認しなければならないのは，ナショナリズムが帯びる特徴が，すでに触れたネイションという言葉のもつ意味の歴史的変容と結合していることである[8)]。ナショナリズムの原基的特徴は，ステイトとしての国家が社会から疎外されたときに特権なき無差別な人民としてのネイションが存在するという観念が生まれことを基礎に，さらにすすんで，国家はそうしたネイションという「自律体 commune[9)]」の意志と自由を体現するべきであるという主張に集約されている。ネイションの運命は特権的身分やネイションから乖離した王朝の利益によってではなく，ネイション自身によって決定されるべきであるという「国民的自己決定 national self-determination」の主張は，そこから導かれたのである。特権や身分による差別からの解

8) フランス革命の中でのネイションの語義が「ステイトを構成する人民」，さらに「ステイトを構成する人民の共同体」という意味をもち，さらにその後「民族」という意味をもつ至ったことについては，「§２．ネイションという迷路」の「ネイションという言葉」を参照されたい。

9) Sieyes, E.（1789）は，ネイションを共通の法律と共同の立法機関をもつ中世自治都市になぞらえてcommuneとして規定した（p.31）。岩波文庫邦訳ではこれを「共同生活体」としているが（邦訳p.28），それでは「共同体」としてのcommunauté（community, Gemeinschaft）との混同が生じる。本稿「ネイションとステイト⑺」の「§２．ネイションという迷路」の「ネイションという言葉」では，邦訳のままに引用したが，ここで修正しておくことにしたい。

放としてのフランス革命，等族国家に分裂しているネイションの統一を通しての人民の自由の確立への希求（ドイツ），帝国支配下の統一・独立運動（イタリア，ハンガリー）は，王や等族，特権的官僚，特定のエスニック集団による国家権力の独占や政治的支配を打破し，カブールのイタリアのように財産資格によって厳しく制限された参政権に基づくものであれ，コシュートに指導された２月革命後のハンガリーのように普通選挙権に基づくものであれ，とにかく国民としてのネイションを主体とした政治社会を構築しようとするものに他ならなかった。ナショナリズム，その原基的特徴は，「ネイションとしての人民の政治的自己覚醒と形成」から生まれる政治的自由の獲得にあり，したがってまた，しばしば知識人や中産階級が運動の主体あるいは指導者となる傾向をもち，その基礎となるナショナル･アイデンティティーはステイトとしての国家が生み出した「無差別な国民」の存在に規定されていたのである。

この特徴を欠くエスニック集団の「愛国」なり「独立」の主張は，前ナショナリズム的政治思想なり運動としかなりえない。明治維新に先立つ水戸学が，武士に訴えることはあっても人民に訴えることなく，それゆえに維新の主流となりえなかったことを想起すればよい[10]。同じことは，トルコや中国の特権的支配層の中から生じた「ナショナリズム」が辿った軌跡の中にもよく見出される。ポーランド貴族の「ナショナリズム」もまた例外ではなかった。そのような思想や運動を「プロト・ナショナリズム」なり「前期的ナショナリズム」と表現するのはともかく，「ナショナリズム」と規定するわけにはいかない。それらが後に述べる「人民共同体としての民族」という主張の先導をなす意義をもったことを認めるとしも，それ自体を「ナショナリズム」とするのはナショナリズムの無概念化を招来する，と言わねばなるまい。康有為と孫文，タンズィマートを主導したトルコ支配層とケマル・アタチュルクの間に継承を見るにしても，両者の間に裂け目が存在するのもまた確かである。

だが，等族国家に分裂させられていたドイツ，オーストリアの支配下にあったイタリア，ハンガリーなどでは，そしてまた維新に前後した日本のように近代的国民形成が未熟であった領域での国家形成，あるいは植民地や保護国に置かれていた諸領域での独立にあたっては，国家の統一・独立・形成の前提として，自由で無差別の市民としての権利を主張しうる「人民の共同体としてのネイション」，つまり「民族」の存在を正統化することが必要とされた。ここに，ナショナル・アイデンティティーなりナショナル・コンシャスネスの覚醒が求められ，それを基礎にネイションが統一・独立した国家を自己の意志に基づいて形成する意志を主内容とするナショナリズムが生まれる。フィヒテの「ドイツ国民」への訴えは，自明の「ドイツ民族」の存在を前提になされたのではなかった。「国民」たりえないドイツ人がプロイセン王国やオーストリー，そして多数の等族国家に分裂していた状態から，「ドイツ人民あるいはドイツ民族 das deutsche Volk」が「ドイツ国民 die deutsche Nation」として自らを解き放ち，自由を獲得することを希求してなされたのであった。そして，フィヒテの呼びかけは，後続して，エスニック・アイデンティティーに基づく人民共同体の存在を基礎とするナショナリズム，マッツィーニやコシュートから孫文，ガンディー（Gandhi, M. K）を経て戦後植民地独立運動に至るナショナリズムの系譜を生み出した。言い換えれば，人民の自由を求めるショナリズムの原基的特徴は，ハンス･コーンが英・仏のネイション概念に対立するものとして捉えたライン右岸以東に特徴的な歴史的な「有機的共同体あるいは統合体」なり自然的実体としての「民

10）維新期のナショナリズムの諸相の中で，このことを鋭く指摘したのに，橋川文三（1994[1968]），pp.37-126がある。

族」という概念と結合したのである[11]。

それでも，人民の自由の実現を目標とする限りでは，ライン左岸ナショナリズムもライン右岸のナショナリズムもナショナリズムの原基的特徴を維持したに変わりはなかった。そのことは，フィヒテがドイツの栄光を中世ドイツ帝国都市の市民（die Bürger der deutschen Reichsstädte）とその市民憲法（burgerliche Verfassungen）に求めていることからも推察しうる[12]。だが，エスニック・アイデンティティーに基づく人民の歴史的に有機的な共同体という概念は，思想的にはフランス革命を生み出した啓蒙思想とは別個の，というよりもそれに対立する系譜の思想的伝統を内包するものに他ならず，そこからナショナリズムが原基的なものから，それに対立する特徴を帯びるものへの転回が生じた。近代ドイツ・ナショナリズムの創始者とも言うべきヨハン・ゴットフリート・ヘルダー（Herder, J. G.）は転回に礎石を与えた思想家としてこれまで位置づけられてきた。この点にあらためて立ち入っておこう。

転回が孕む原基的特徴の否定

フランス啓蒙思想は，人間精神の進歩の歴史としてルネサンスを，そしてデカルト以後の時代を描いた。革命期のその代弁者であるコンドルセが死の前に残した『人間精神の進歩に対する歴史的展望の素描』は，世界には合理的解決方法があり，人間社会は先進的社会に向かって進歩を遂げ，やがて諸社会は合理性の点で収斂するという確信と展望を表明し，フランス革命はその先端を，つまり人間社会が普遍的原理として承認するものを体現すると高らかに述べていた[13]。このような考え方は，ヘルダーにとっては，「世界じゅうのどんな遠隔の国民にも，どんな最古の時代にも，美徳と幸福の点で自分たち自身の理想を押しつけたがる[14]」主張に他ならなかった。なぜならば，人間が個性をもつように国民は個性を，あるいは固有の歴史と文化をもつのであり，国民間や時代間に優劣，先進・後進の区別をおくわけにはいかないからである。「全体像とか普遍概念とかいうものは，すべて抽象にすぎないのだ。一国民，あるいはあらゆる国民の全体的統一を多様な隅々にいたるまで考え，しかもその統一を見失わないなどというのは，創造主だけがやれる仕事なの」であり，「人間の完全さというものはすべて国民的，時代的であり，よく見れば個性的である。時代，風土，必要，世界，運命によってきっかけを与えられなければ，何事も作り上げることができない[15]」というのがヘルダーの主張であった。

ヘルダーによって謳いあげられた反啓蒙思想は，疑いなくフランスの傲慢に対抗し種々のネイションの平等を訴えるものであり，同時にまた貴族や等族諸侯に対抗する国民的社会の形成を促すものであった。だが，それとともに，人民の自由－それは啓蒙思想がもたらしたものであった－を原基的特徴とするナショナリズムには無かったネイション概念の正当化に基づくものでもあった。

フランス革命の中から生まれ出たナショナリズムがナショナル・アイデンティティーの近代的性格を直接に反映するものであったのに対して，ヘルダーのナショナリズムはネイションをナショナル・アイデンティティーの本源的・自然的側面に重心を置いて観念した。彼は，人間社会を国民（Volk, nation）の社会として把握し，それを超える普遍的原理ひいては進歩を否定したが[16]，それに関連して，エスニックな共

11）Kohn, H.（1994）.
12）Fichte, J. G.（1971[1808]）, pp.355-356（邦訳，pp.138-139）.
13）Condorcet（1970[1793-94]）, pp.145-239（邦訳，pp.181-287）.
14）Herder（2004[1774]）, p.30.（邦訳，p.106）.
15）Ibid, p.26（邦訳，p.102）.
16）ヘルダーの思想を西欧思想の基本的対抗軸の一方として位置づけたものに，アイザイア・バーリンの一連の考察（Berlin, 1979-1, 1979-2）がある。

同体としてのネイションが種々の属性をもって実体として存在することをナショナリズムの基点としたのである。それは，一方では，市民革命による人民の自由の獲得をネイションの分裂の克服や他のネイションの支配からの解放を通して実現しようとする人々に「民族統一」や「国民的自己決定あるいは民族自決」のための強力な武器を与えるものでもあったが，他方では，自然的な存在としてのナショナルな共同体という概念を基盤にして，ナショナリズムが原基的特徴の否定を孕むものへと転回する宿命を付与したのである。

転回は包括的なものであった。第１に，人格化されたネイションが国民あるいは市民から自立して存在するという認識から，人々が「集団に属する確信」や「有機体の一部」をなすという確信が生まれ[17]，さらに，ナショナルな共同体の統合と保存，そしてその利益と栄光が，国民あるいは市民や個人を支配する傾向が生まれる。ここでは市民あるいは個人とナショナルな共同体の間の緊張関係は，諸個人が人格化された共同体としてのネイションの中に溶解されることによって消し去られ，前者は後者の構成要素であることを前提とする存在となる。

言語なしに個人の精神的行為は無く，シンボル複合体を伴う社会関係をもたない個人は存在しない。客体化された人間の集合的行為から生まれた制度や規範は個人をある意味で支配し，個人のアイデンティティー確立はそのような制度や規範を主体に「内在化 internalization」することを不可欠の要素としている。だが，同時にどのような文化，制度，規範なども，人間の主体的な産出行為，つまりバーガーの言う「外在化 externalization」と「客体化 objectivation」無しには存在しえない[18]。そのような行為は，いかに現存のコード，制度や規範に従うとしても個人としての人間の主体的営為によって実践され，そうであればこそ社会科学が追求してきた側面，つまりコード，制度，規範，そしてシンボル体系の変化・変容が生じてきた。特定のネイションの一員であることは，特定のネイションによる命令を無条件に受容しなければならないことを意味するわけではない。ナショナルなシンボル複合体の変化・変容は，ネイションが諸個人のとりむすぶ社会関係であり，自由に自己の目的を達成しようと試みる諸個人の意思と行動がシンボル体系の変化・変容をもたらすことを，またナショナル･アイデンティティー自体を動かすことを教えている。

このような諸個人の集合的行動が存在し，それゆえにある社会が独自の個性をもつことは，しかしながら諸個人がネイションという個体に融合されることを意味しない。それにもかかわらず人格化されたネイションを卒然と前提することは，諸個人とその集合体であるネイションの間のダイナミックな関係，つまりシンボル体系の変化・変容をもたらすような弁証法を無視することにつながる。それは，ある特定のナショナル･アイデンティティーに基づくネイションのイメージや観念を万古不易のものに変え，シンボル複合体との関係での諸個人の自由な思想と行動を制約し，未来までも「約束されたもの」としてネイションから奪ってしまう。

ここからさらにもう一つの問題が生じる。ネイションを個人に優先させるとき，国民と統治者・政府の関係が政治的関係にあるにもかかわらず，あたかも統治者・政府が国民的な共同体

17）Berlin（1979-1）は，ナショナリズムの特徴を人々がある性格を有する集団に属し，それが目的や価値を形成するという確信，そうした集団が有機体をなすという確信，そのような「われわれ」の集団への忠誠，ネイションの目的を阻害する者の排除などの４点においている。

18）人間の産出行為としての「外在化」，産出された文化や制度の「客体化」，そのような客体の「内在化」の関係，特にアイデンティティーと「内在化」については，Berger（1990[1967]）の‘1. Religion and World-Construction’, pp.3-28（邦訳では「第１章，ノモスとコスモス」pp.3-42）を参照されたい.

を代表するかのような錯覚と幻想がしばしば生まれる。ステイトとしての国家とナショナル・アイデンティティーの関係からも判るように，シンボル体系は統治者によって操作されうる側面を有し，また，国家はネイションという共同体の唯一の平和・保護共同体であるジッペとして現存する。これらから，国家とネイションの混同が生まれ，国民は統治者＝ネイションの命にしたがうべきことが自然であるかのような観念が，あるいは国民が国家に従属するようなナショナリズムの語義転換が生まれる。ナショナリズムが「国家主義 Étatisme, Statism」という意味を獲得する[19]。ナショナリズムにイデオロギー的正統性を置く国家や国家機構が社会に優位に立ち社会生活を支配するような国家にあっては，ナショナリズムは容易に国家主義と同義となる。国家がその領域下の国民のために存在するのではなく，国民が特定の国家権力に無条件に奉仕するべきことが自然であるかのように語られる状況すら生じる。「非国民」といったレッテルはこうした錯覚と幻想の所産に他ならない。この言葉は，統治者とは異なる信念やアイデンティティーをもって行動する人々が社会を構成していることを否定している。自由な人民から構成される社会を一個の個性をもった共同体に置き換えるという論理的操作は，こうして自由な人民と社会それ自体の否定にも行きつく。

第２に，ネイションが実体としてあらかじめ存在するという観念は，ネイションの存在証明の努力を，つまりエスニックな，あるいはナショナルなアイデンティティーを構築するシンボル体系の探索を導く。ヘルダーにとっての言語と民謡（民衆詩）は「ドイツ文化」の存在を証明するものであったが，そればかりでなくＡ・Ｄ・スミスの言う「共同体を位置づけ，その『真の状態』を明らかにするため」の「２つの方法」つまり「風景」と「歴史」が「共同体の個性的な歴史と形而上学を提供し，そこから共同体再生の倫理が，共同体を先導すべく，生み出される」ことになり[20]，さらにネイションを顕示する旗，徽章，歌，肖像，儀式などが創造されていく。「想像の共同体」を「創造する」過程が生まれる。古来のものではないキルトがスコットランドの，同様にダビデの星がユダヤの象徴とされる。この過程はまた，ナショナル・アイデンティティーの「本源性」「自然性」を強調する。そして，ナショナルな共同体の自由，独立，栄光を求めるときに種々のアイデンティティーのシンボルが政府や政治的・非政治的諸団体などで駆使され，アイデンティティーに基づく政治手法が生まれる。

諸個人からなる社会がネイションとして統合されること自体，自明であるとは決して言えない。前にも指摘したように，ナショナル･アイデンティティーは単一の揺ぎ無いシンボル体系で表現されるものでもなく，種々のイデオロギーと結合し，並存しうる。ネイションを自明のある形をもった実体として把握することは，したがって，一方では，常にナショナルなシンボル体系のあるものに優位を与え，あるアイデンティティーを固定化し，ナショナリズムのある形態のみを選択し，他の形態を否定するという作用をもたらす。「日の丸」「君が代」の強制はその典型でもある。また，他方では，ネイションを自己完結的に把握することから，普遍的価値や信念と結合するイデオロギーの存在を否定する傾向，したがってまた人々の多様な思想・信念･価値を認めない傾向を生み出す。このことはま

19）日本で言われてきた「国家主義」は，ナショナリズムを言い換えたに過ぎない側面をもち，それはまた「国家」という言葉がステイトばかりでなく中国語起源の意味とその変容を含んでいることから生じている。その点で，ステイトとしての国家を優位に置く，あるいはステイトの社会への干渉をポジティヴに主張する statism とは区別する必要があるが，昭和の国家主義が statism の側面を併せ持ったことも看過してはならないであろう。

20）Smith, A. D.（1986）, p.183（邦訳，p.215）.

た，インターナショナリズムやコスモポリタニズムへの強い反発を内包する論理が，ナショナルな共同体を唯一の社会的実体とすることから生まれることにつながる。ヘルダー的ナショナリズムは，「アイデンティティーの束」として生きる人々に対して，特定のナショナル・アイデンティティーを優越させ，アイデンティティー・シンボルに基づく政治がもたらす緊張を生み出す。

ヘルダー的なネイション概念に基づくナショナリズムが原基的特徴を持ち続けるためには，諸個人の集合的行為の結果としてナショナル・アイデンティティーが存在し，ナショナルな社会が人民の自由を基底に構成され，しかもネイションが絶対的に孤立して自己完結的に存在するという諸条件が存在する必要がある。だが，これはシンボル体系の本質やネイションを生む歴史的諸条件からしてありえない諸条件に他ならない。ヘルダー的なネイションの存在証明は，アイデンティティー・ポリティックスを生み出し，それはまた種々のアイデンティティーの間の，様々なエスニック・アイデンティティーの間の緊張をもたらす宿命をもつ。つまり，ヘルダー的なナショナリズムは原基的特徴の放棄につながる危険を宿命的に胚胎しているのである。

第３に，反啓蒙思想としてのナショナリズムは，ネイションという人民共同体の永遠と伝統を強調することによって，ナショナリズムと「反合理主義」，「伝統主義」との結合をもたらす途を開く。ナショナルなシンボル複合体を個性ある実体，固有の「民族」として観念することは，ネイションが歴史的に形成してきた価値，記憶，伝統のあるものの神聖化，世俗的宗教としてのネイションの教義を生み出すことによって完成される。それは，「古来の」あるいは「本来の」シンボル体系を固定化して普遍性や進歩を否定する傾向，さらには神話と歴史的事実を混淆して神話や歴史的記憶の学問的検討を排斥する傾向などと結合する。明治中期に久米邦武の著した論文「神道ハ祭天の古俗」を倉持治休らの神道家が糾弾し久米が帝国大学辞職に追い込まれた事件や日露戦後に生じた「南北正閏問題」論争[21]，日本の「超国家主義」や「国体明徴運動」による美濃部達吉の「天皇機関説」批判などは，そうした傾向を端的に表すものに他ならない。また，一般に保守主義とナショナリズムが種々の形態で結合することが，ナショナリズムのもつ「伝統主義」の反映であることも容易に推察しうるであろう。

ネイションの神聖化あるいは反合理主義は，一方ではネイションにまつわる神話の「科学的粉飾」を必要とし，他方では真理の探求とは別個の主情的政治の導入をもたらす。紀元節が果たして正当な根拠をもちうるかどうか，あるいはネイションとしての日本の国民の形成過程を問うことは傍らに置き，「独立国であれば建国記念日が無いのは異常だ」，「戦前からずっと２月 11 日が建国記念日であったからには，別の日を建国記念日とするのはおかしい」，「日本は古来存在したのであり，だからその起源を建国記念日とするべきだ」という論理が通る[22]。「学者」や「知識人」の「理屈」を嫌い，所与の観念にしたがう「庶民の日常的感覚」は，ネイションを意図的に形成する際の抵抗をももたらすが，いったんシンボル体系が確立された後には，ナショナリズムのもつ反合理主義や伝統主義を支える基盤ともなるのである。

また，共同体が生み出された時間と空間，共同体の興隆をもたらした英雄の物語が「神話」として作用する中で，人々は共同体の運命を主情的に内在化する。ナショナリズムは，ここでは，差別化された国民＝民族的宗教，市民宗教を背景としてもち，それが排他的であろうとなかろうと特殊な物語がネイションの運命に結び

21）久米論文とそれをめぐる動き，また「南北正閏」問題にかかる喜田貞吉の回想などについては，松島栄一（1976）を参照。

22）建国記念日にかかわる主情的論議については，Ruoff（2001），pp.174-183（邦訳，pp.244-254）を参照されたい。

つく。祭典，祭祀，儀式，神社や記念碑と遺産の探訪などは，「神話」や「民族の伝統」というシンボルを日常から離れた「ハレ」の空間の中で人々に実感させる[23]。そうした試みはフランス革命１周年を記念した1790年７月14日の「連盟祭」，さらに1794年，６月８日に全国で開催された「最高存在の祭典」から，体制を問わず多くの国々においてなされてきた種々の祭祀，祭典，行進，祝典などに見られる。無論，昭和15年の「紀元2600年式典」やナチスのニュルンベルク党大会もそうした装置の１つであった。

シンボルを利用して感情的に大衆を動員し，シンボルを通じて大衆にアイデンティティーを与えること自体は，近代の政治の中で不断に実践されてきた。多かれ少なかれ市民宗教は近代国家の統治と国民統合に不可欠のものである。バーガーに手法を借りれば，ネイションをコスモスとすることからネイションのノモスが規定される。「神話」や「民族の伝統」などに強く依存するナショナリズムは，ネイションのシンボルを操作することを通じて，ナショナルな共同体に人々を結合し，ネイションを「体現」する国家への忠誠，ネイションとしての連帯感，「聖なるもの」としてのナショナルなシンボルをめぐるロマン主義的昂揚，そして「邪悪」な敵への憎悪の内面化を追求する。人々の権利や平和の確保，福祉や生活水準の上昇などの合理的探求よりも，「聖なるもの」，ネイションの運命に自己の運命を同一化することに重みを置く宗教的・反合理主義的で主情的な政治が登場する。祖国に身を捧げた英雄や無名戦士が称えられ，国家やナショナルな指導者に抵抗するものは「反逆者」「卑怯者」とされる。争いの由来や背景の分析，そしていかに戦えばいいのかという冷静な計算よりも，精神的昂揚によって「国難」を克服する精神主義が生まれる。そのような舞台装置なしには，大衆を戦場へと動員することはできないであろう[24]。

そのような主情的なアイデンティティー・ポリティックスは，政治の評価や人間の行動基準をも主情的なものとする。馬鹿げた政治的冒険や愚かな政策の失敗に対する批判的検討よりも「祖国」と運命をともにし，そのために斃れた人々を悼み，称えることが共同体感情に一致する。少数の航空機による機動部隊への攻撃という目的から乖離して，それ自体が目的となった「特攻」という拙劣な作戦での無謀な死をもたらした作戦指導への批判は，使者を「軍神」として祀ることによってあらかじめ封ぜられ，戦後になってもなお，死を賭した若者の行動への祈りによって覆い隠される[25]。言い換えれば，アイデンティティー・シンボルに基づく感情を利用する政治が合理主義的判断を圧倒する事態がもたらされる。

ナショナリズムのもつ反啓蒙思想と反合理主義は，一方では，前にも述べたこととあいまっ

23）シンボリックな政治によって大衆がいかに動員されたかについては，Mosse（1975）が詳しい。モッセの独自性は，ファシズムに見られるシンボルを操作しての国民的統合が，ファシズム特有のものではなく，むしろ民衆が政治に参加するという過程で生じたということを示している点にある。

24）国民によって担われる戦争の特質とそれが「聖なるもの」として位置づけられ，また「祭り」と同様の機能を果たすという点は，ロジェ・カイヨワ（Caillois, 1963）によって描かれたところである。モッセとあわせて参照されたい。

25）第２次大戦末期の「航空特攻」をはじめとする特攻作戦は，熟練した搭乗員，航空機などの不足から最早大規模な空母機動部隊への航空攻撃がなしえないという条件の中で，敵の空母機動部隊に打撃を与える目的で開始された。これについては，そもそもそうした作戦自体が有効でありえ，また作戦として許されうるものかという問題があるが，特攻作戦開始以来，すべての作戦が勝敗や戦果を度外視した自殺的傾向を帯びるようになったことを看過してはならない。機動部隊を発見できず，当初の攻撃が実現しなかった場合には滑走路や橋梁に自爆突撃をすることを強要するような事態が，また機体不良や攻撃目標が発見できずに帰還した攻撃隊員を精神的に追い詰める事態が生まれのである。作戦

て普遍的でインターナショナルなものへの反発と否定につながり，他方では，反知性主義，反知識人的傾向をもたらす。ナショナル・アイデンティティーの探索と発見，そして再解釈と再生は言語学，歴史学，考古学など種々の「科学」の動員によって可能となるのだが，普遍的科学の否定や知識階級への嫌悪と結びつく傾向をもつ。「土着」や「庶民」に根ざした思想と感情が尊ばれ，国際主義は愛国主義の反対物とされ，科学的探究は難解あるいは空論であり，浮薄なものとされる。

といっても，このことが，ナショナリズムにとって学問が不必要であることを意味するわけではない。それどころかナショナリズムは，ネイションの神話や歴史を正当化する学問を必要とする。つまり，ナショナリズムに資する学者や学問を選択的に優遇し，普遍的な学問的研究や知識人の活動を否定する社会的心理を醸成する。知識人が先端的知識を追って外国の学説を自国に適用あるいは輸入する「浮薄」は「土着」の視点や「庶民」によって批判されるが，そうした「土着」あるいは「庶民」の感情は，しばしば特定のナショナリズムを支持する学者や研究者の動員によって利用される。

第４に，集合的なナショナル･アイデンティティーに基づいた個性的なネイションという信念は，普遍的なものの否定にとどまらず，他のアイデンティティー，あるいはシンボル複合体とは容易に並存しえない宿命をもつ。言い換えれば，ナショナル･アイデンティティーに基づくナショナリズムは，他のネイションやナショナル・アイデンティティーに限らず，そのナショナル･アイデンティティーに包含しえないシンボル体系やアイデンティティーに対して差別的であることを本質としている。

差別は，他者への好奇心や憧憬をときとして惹起するが，他者との関係が対立を含むときには容易に排他を導く。言語ナショナリズムに見られた他の言語使用への罰，宗教的ナショナリズムに見られる他の宗教への敵対，英雄物語や「民族の悲劇」につきまとう「宿敵」との対立などを挙げるのは困難な作業ではない。殊にナショナリズムが，ステイトとしての国家形成と結合して，固有の領土あるいは郷土の回復や維持，「約束された土地」を強く押し出すときには，当然のことながら他のネイションあるいはエスニック集団への敵対が生じる。他のネイションへの排他と敵対を含むアイデンティティー・ポリティックスあるいはシンボリック・ポリティックスは，相応する排他と敵対を呼び起こさずにはいられない。かくして歴史的な物語は果てしなく継続する傾向を孕む。

アイデンティティー・ポリティックスの最大の危険は，特定のアイデンティティーを支えるシンボル体系から自己のイデオロギーと政策を「聖なるもの」「正義」「正統なるもの」とし，他を「邪悪」「悪徳」「異端」として憎み，排除あるいは抑圧する論理をもたらすことにある。そのようなイデオロギー操作がなされるとき，しばしば当面の敵は「永遠の敵」であり，「殲滅されるべき敵」となる。しかも，そうしたアイデンティティー･ポリティックスが前面にたつ場合には，ヘルダー的ナショナリズムの負の側面が噴出し，それを抑制しようとする政治的諸力は抑え込まれる。よしんば，当面の敵対者がかつて友好的であったとしても永遠の敵であるかのように意識される。バルカン戦争からナゴルノ・カラバフ紛争，旧ユーゴスラヴィア内戦，パレスチナ問題までそうした構図は変わらない。互いにそのようなアイデンティティー・

の有効性よりも作戦の精神と形式に優位が与えられたのである。真に死者を弔うとするならば，死者を生み出した作戦や戦争指導の意味と責任を問う必要がある。近年の「靖国神社参拝」は，一方では，そもそも「靖国神社」が戦死者を祀るにふさわしいものかという問題を伏せているという問題を孕んでいるが，他方では，「参拝者」が死を生み出した戦争や作戦指導についての議論を避けているという点で，極めて主情的なアイデンティティー・ポリティックスの１形態であると言わざるをえない。

ポリティックスを前面に立てて対立する集団が存在し，しかも「安全保障ジレンマ」が媒介となる場合には[26]，ことさらに絶え間ない紛争と殺戮を生む傾向が生じる。そうして生じる戦争や紛争は，互いにとっての「聖戦」となり，妥協を排していずれかの決定的敗北まで継続されるべきものとなる。イデオロギーに基づく戦争あるいはイデオロギーを動員しての戦争は，正邪，善悪の戦いとして位置づけられるだけに長期化し，破壊的となりがちである。

それどころか，ヘルダーが展望しえなかったことだが，自己のネイションの栄光物語や自己のネイションの歴史的使命が他のネイションを支配することの正当化をもたらしさえする。しかも，ヘルダーには見られなかった一種の社会的ダーウィニズムや歴史的進歩の肯定が，「優越したネイション」や「文明的なネイション」の神話と結合した場合には，帝国主義的な支配や後進的ネイションへの干渉が正義であり使命であるかのように人々によって受容される。

本質的に差別的である複数のナショナル・アイデンティティーが相互に承認し合い，共存するためにはさらに高位の価値，規範，利益などの共有が，つまり普遍的な価値や原理の承認が必要とされる日常的な憎悪の再生産を終焉させるには，絶対的な孤立なり鎖国が許されない限り，ネイションを超えたアイデンティティーの確立が求められる。ヘルダーはネイションの個性を求めることから平和が到来することを展望したが，それはヘルダー的なナショナリズムの地平に実現することのない夢であった。

個人のナショナルな共同体への溶解，ナショナル・アイデンティティーに基づく政治の誕生，反合理主義・反知性主義・反国際主義と伝統主義，排他性と差別性－これらヘルダー的ナショナリズムがもたらす特徴は，ヘルダー自身の展望したナショナリズムとも，またナショナリズムの原基的特徴とも相容れない側面を有する。ハンス・コーンやＡ・Ｄ・スミスのネイションに関する２分法は，このようなナショナリズムの内容の転回がもたらしたネイション概念の変容を背景としている。つまり，ヘルダー的なナショナリズムとともに，ネイションの本源的・自然的側面を強調することを特徴とし，「領域的ネイション」なり「市民的ネイション」に対立するネイション概念に基づくナショナリズムが展開されるようになったのである。

アイデンティティー・ポリティックスの諸契機

ナショナル・アイデンティティーに基づくネイションとしての人民の共同体の正統化に基づいて，無差別のネイションとしての人民からなる政治社会を基礎とする国家の形成を求める－これが 19 世紀ナショナリズムの求めたものであった。そうであればこそ，国民国家（nation-state）の形成はナショナリズムの目標到達を意味し，ナショナリズムはやがては衰退するに違いない経過的な思想・過渡的な運動であると 19 世紀の知識人は考えた。コンドルセは，精神の進歩の結果として諸国民の戦争や征服が衰退し，ヘルダーは諸国民の個性の承認が優越した国民による他国民の支配を終わらせると想定した。つまり，「領域的ネイション」に基づくにせよ，「エスニックなネイション」に基づくにせよ，諸国民間の対立はやがて消滅するというのが，互いに対立しあったナショナリズムの父たちの展望したことであった。だが，そうはならなかった。ナショナリズムやアイデンティティー・ポリティックスに基づく諸国民間の戦争は 20 世紀に入るとともに燃え上がり，ナチス・ドイツや「大日本帝国」の敗北，そして旧植民地・従属地域の独立とともに非合理的ナショナリズムは消え去るという期待も裏切られ，ソ連邦の崩壊とともに「歴史の終焉」がもたらさ

26）アイデンティティー・ポリティックスあるいはシンボリック・ポリティックスに基づく憎悪が戦争に結果すること，それと安全保障ジレンマの関係については，Kaufman（2001）が丹念な検討を行っている。

れるとの希望も潰えさろうとしている。

では，何ゆえにナショナリズムはナショナリズムの父たちと19世紀の知識人たちの予想を裏切ったのであろうか。何よりも第1に，「§3．ナショナル・アイデンティティーの近代性」で述べたように，ステイトとしての国家と産業社会，そしてそれに基づく国際関係が不断にナショナル・アイデンティティーを再生産することにあらためて注目しなければならない。

一方で，ステイトとしての国家は，ネイション形成の基盤を提供するとともに，自らが国民的社会に人々を統合する試みを追求し，特定のシンボル体系に基づくナショナル・アイデンティティーの確立を推進する。また，そのような国家を主体とする国際関係の成立は，自国民と外国人の区別をもたらし，人々がナショナルな社会に帰属する意識をもたらす。他方，国民的産業社会は，それ自体の発展によってナショナル・アイデンティティーを生み出す市場の広がりや社会構造の形成を促し，同時に孤立していた人々を交換に巻き込むことから伝統的社会を解体し，外部世界への接近とともにロマン主義的反発を醸成する。また，産業社会の主動因とも言える技術進歩は，ナショナル・アイデンティティー形成・供給・操作の可能性とその受容手段を提供する。近代はナショナル・アイデンティティーとともにある，と言わねばなるまい。

さらに，権力を集中・系列化したステイトによって画された領域は政治的にも経済的にも固有の有界性をもつ。言い換えれば，ステイトとしての国家，つまり主権的領域国家は1つの運命を共にする政治的・経済的社会を生み出すが，ステイトと国民経済は，ジッペとしての諸国家が対抗しあう主権的領域国家システムの中に，また国際公共財の供給が不完全な中で国際経済関係からもたらされる利益の分配が諸国民経済間に緊張関係をもたらす普遍的世界市場の中に位置する。この結果，「国家理性」，「国益」をめぐる絶えない国家間緊張・対立・角逐が生まれ，それは「旧き市民社会」や王国の富の源泉をなした肥沃な領土と人口を獲得するための侵略・併合とは別の意味をもつ植民地獲得や侵略・併合などをもたらしてきた。そのような国家・国民経済間の対立は，ネイションとネイションの間の闘争として現象し，ナショナル・アイデンティティーを利用する国民の精神的・物理的動員と自己が帰属する共同体と郷土を愛する愛国主義を利用したイデオロギー操作がなされ，政府の意図を超えた「ナショナリスティック」な民衆の政治的行動をも生み出してきた。さらに，資本主義的な植民地や勢力圏の獲得が追求され，しかも支配下に置かれたエスニック集団に対しては「無差別の国民」であることを「文明」への「同化」によって強制するというネイション概念のグロテスクな拡張が生まれさえした[27]。無論，植民地領有は第2次大戦後に消滅してきたが，諸国民間に緊張が存在することに変わりはない。言い換えれば，ステイトとしての国家と市場の普遍性に基づく国際関係は，不断にナショナリズムを再生産する構造的特質を有している。

そして，国家と産業社会が強固になればなるほど，大衆政治が求められる。モッセがファシズムのアイデンティティー・ポリティックスの起源を国民的社会の成立に求めたように[28]，祭祀と神話が必要となる。戦争が君主のものではなくネイションのものとなればなるほどネイションを動員する必要性が生まれ，戦意高揚のためのアイデンティティー・ポリティックスが生まれる。まして，国民の間に対立が存在するときにそれを統合するためにはナショナルなシンボル体系に依存するシンボリックな政治が有効に機能する。 E・H・カーが述べたように，「ナショナリズムは，国家共同体内の諸階層の一見融和しがたい利益の衝突を融和させる力の一つである」が，「これに対応する力として，諸国

27）小熊（1998）は，日本を題材にこの問題に接近した労作である。

28）Mosse（1975）.

家間の現在の一見融和しがたい利益の衝突を融和させるために持ち出され得るものは存在しない」のである[29]。

第２に，エスニックな起源をもつ１つのネイションが１つのステイトの下に自己完結した社会を構成するのは稀有である。種々のエスニック集団が固有の国家をもたずに移住し，また種々のエスニック集団を抱える帝国が国民国家に先行して存在し，しかも多分に混住がなされてきた歴史を背景とする政治的現実は，到底「１民族１国家」を許さない。そのような現実の中でなされる特定のエスニック・アイデンティティーの探索・発見と再生･再解釈によるネイションの存在証明の試みは，社会の亀裂と分裂を顕在化する潜在的力能をナショナリズムに与える。

たとえば，アルザスに住むドイツ語系住民が自己を「フランス人」と意識し，フライブルクやバーゼルのドイツ語系住民が自分の属する州とその盟約団体である「スイス」に帰属意識をもち，神聖ローマ帝国の後継諸国に多数の非ドイツ系住民を抱えるときに，ゲルマン神話と帝国の歴史，そしてドイツ語を共有する人民の単一の共同体を想定することは，それらの社会に複雑な亀裂や緊張をもたらす。フランスやイギリスでは歴史を通じて種々のエスニック・アイデンティティーを凌駕するナショナル・アイデンティティーが形成されたが，それでもブルターニュやウェールズのアイデンティティーは残存する。そのような中でのヘルダー的ネイションの存在証明とそれに基づくアイデンティティー・ポリティックスは，「アイデンティティーの束」をもって生きる人々に対して，特定のナショナル・アイデンティティーを優越させる政治が生み出す軋轢やアイデンティティー・シンボルに基づく政治がもたらす緊張を生み出す。

ネイションとしての国民統合が権力を集中･系列化した国家において進行するときに，ネイションとステイトの境界のずれが社会問題化する。国民統合を求めるナショナリズムは，それに反発するナショナリズムなりエスノナショナリズムの対抗をもたらす。そのとき，政治的対立はアイデンティティー・ポリティックスの応酬をたっぷり含むこととなる。無論，どのエスニック集団も政治的エスノナショナリズムをもつわけではない。また，エスニックあるいはナショナル・アイデンティティーは実に多様な形態をとり，変化・変容を遂げる。だが，そうであればこそ，ある時代の，あるいはある特定の場所では政治的ナショナリズムに向かうことの無いアイデンティティーが，別の時代と場所では政治的ナショナリズムを生み出すこともありうる。19 世紀半ばまでは無視されていたような「小ネイション」のナショナリズムが，環境としての勢力関係の変化や当該集団の政治的覚醒などからその後に政治的な焦点となることは決して珍しいことではない。また，あるネイションの独立はしばしば逆に少数のエスニック集団を生み出す。ロシアの外に分散するロシア人，同じようにハンガリーの外側に散在するハンガリー人，クロアチアやコゾヴォのセルビア人が抱えた問題を見ればよい。現実は，ネイションという人民共同体が自明のように，しかも領域性を伴って分別可能な形態で存在するわけでないということを明瞭に示している。

種々のエスニック集団が重層的･複合的に配置されている領域で，特定のエスニック集団に基盤を置く支配権力がポピュリスト的動員を行いながらアイデンティティー・ポリティックスを駆使する場合には，バルカン戦争のような様相を示すことになる。つまり，特定のエスニック集団によるアイデンティティー・ポリティックスの展開は，別のエスニック集団のエスニック・アイデンティティーに基づくアイデンティティー・ポリティックス生成をもたらし，それはまた他の集団の反作用を呼び起こす。その結果，ナショナリズムやエスノセントリズムの台頭とともに，それまで普通の隣人として住み分け合ってきた人々が陰惨な殺戮を相互に繰り返

29）Carr（1964[1939]），p.231（邦訳，p.418）.

すことが生じる。しかも，エスノセントリズムの歴史観が継承されるときには，同じ歴史が繰り返される。

このようなナショナリズム再生産の基本構造は第２次大戦後も変わることはなかった。一方において，第２次大戦後に生じた新たな諸国家の誕生，そして冷戦後のソヴィエト連邦の解体による新たな国家群の形成などは，それまで自己の政治的アイデンティティーを表明しなかった幾多のエスニック集団がエスノナショナリズムを主張する機会をもたらすとともに，「国民形成 nation building」の操作を通じて支配する側とそれに反発する支配される側のエスノナショナリズム高揚の基盤を与えた。また，他方において，市場経済の発展は，産業社会がナショナル･アイデンティティーに与える影響が先進的中核を越えて拡大することを意味し，市場を通じる諸地域や諸エスニック集団の交換と統合をもたらしながら，エスニック集団のアイデンティティー探求やロマン主義的反発を生んできた。また，メアリー・カルドアが指摘するように，グローバル・エコノミーやネットワークの形成は域外の亡命難民などから域内でのアイデンティティー・ポリティックス支援の手段を提供してきた[30]。「ナショナリズムの時代」に「エスノナショナリズムの時代」が続くのは不思議なことではない。また，すでに「国民国家」が形成された先進的「中核」においても文化多元主義（multiculturalism）とその批判としての極右の台頭が問題となるような状況が生まれる。アイデンティティー･ポリティックスは近代社会の政治的ダイナミズムに組み込まれているのである。

第３に，すでに触れたように，ナショナル･アイデンティティーに基づく政治は，それが「想像され」，また「創造された」共同体感情に基づくにせよ，他の政治的・経済的・社会的利害対立によるネイションの分裂を圧倒する潜在的可能性をもつ。その結果，エスニック・アイデンティティーなりナショナル・アイデンティティーが人民共同体存在の根拠として有効に機能する際には，ナショナルなシンボル体系が共同体を維持する機能をもって支配力をもち，人民の政治的地位よりもナショナルなシンボル体系の下で人民が「平等に」ナショナルな権威に従うことがナショナリズムの核心となりうるという事態が生まれる。明治維新以後の国民国家形成にあたって天皇の下で等しく「臣民」であるという観念が創出され[31]，それに基づいて構成されたナショナリズムがやがて昭和の「超国家主義」を生み出すイデオロギー的基盤をなしていったのはその一例である[32]。

このようなアイデンティティー・ポリティッ

30）Kaldor（2001[1999]），pp.101-107（邦訳，pp.169-176）.

31）丸山真男（1996[1957]），pp.127-130 と同時に，西川長夫・松宮秀治（1995）所収の飛鳥井雅道「明治天皇・『皇帝』と『天子』のあいだ」などを参照されたい。

32）丸山真男は，「超国家主義の論理と心理」（1995[1946]）や「戦前における日本の右翼運動－モリス博士の著書への序文」（1995[1964]）などで，明治以来の日本近代国家の中に国家主義がビルトインされていたこと，また右翼ナショナリズム，超国家主義などに共通する精神的傾向が一部右翼のみでなく一般的に存在したことを指摘した。これに対して，明治期の天皇制と昭和期の天皇制の相違に関り，安丸良夫（1992）などから最近丸山批判がなされているが，明治期における「国体」正統化論理の射程の中で昭和期の超国家主義が誕生していること自体は否定しがたいであろう。無論，安丸が指摘するように，津田左右吉や和辻哲郎の天皇制理解，飛鳥井の前傾論文で指摘されている大久保利通や伊藤博文の思想と行動などの意味を探求することは必要であるが，そのことと，明治期に創出されたシンボル体系が彼らの意図を超えた射程距離を持って昭和期の超国家主義を生み出す基盤となったことを主張することの間に矛盾は無いと見るべきであろう。また，超国家主義が単なるナショナリズムではなくラジカルな改革を志向していたことも，橋川文三（1964）が述べるようにまた確かであるが，彼らの主張の基盤が明治期のシンボル体系にあったこともまた看過されるべきではないであろう。

クスの機能は，国内に社会問題を抱えて諸階層・階級・地域間などに潜在的・顕在的対立が存在するとき，しかも既存の支配層の政治的指導が行き詰まり，既存のイデオロギーが機能不全に陥るときに有効に発揮される。昭和恐慌後の大川周明の国体イデオロギーや北一輝の「日本改造法案」や「2・26事件」の青年将校に見られる国家改造論のように，ナショナル・アイデンティティーに基づく政治あるいはナショナルなシンボル体系に依存してネイションの「聖なる使命」とアイデンティティー・ポリティックスの下での「平等」や「正義の実現」を強く訴えるナショナリズムが生まれる。ナチスが資本主義的搾取や堕落の象徴としてユダヤ人をあげ，独自の人種的な，同時に「社会主義的」なナショナリズムを提唱したのは，「超国家主義」と並ぶ典型例とも言える。同様な側面は，アラブ・ナショナリズム衰退後の中東における「イスラム原理主義」の台頭や，それまでの国家の正統性が崩壊した旧ユーゴスラビアや旧ソ連において生じた様々なアイデンティティー・ポリティックスにも存在する。西欧にあっても，保守主義と社会主義の対抗が色褪せて政治的対抗軸が曖昧となるにつれて，しかしながら失業が解消しないような状況の中では，既成の政治的主張と政治集団への批判的勢力としての極右勢力が台頭する。

注目しなければならないことに，このようにラジカルなナショナリズムの場合には，一般に現状をもたらした敵として何らかのスケープ・ゴートが設定される。ナチスにあってはユダヤ人がそれであり，「超国家主義」にあっては「社会主義者」，「資本家」そして自由主義的な「君側の奸」がそれであった。現代にあっては，それは移民や外国人，さらに社会の中で恵まれた地位にあると見える特定のエスニック集団，たとえばクロアチアの都市部セルビア人であったりする。無論，このようなナショナリズムの機能は，国際的な諸国家の対立があるときには，前に述べたように「安全保障ジレンマ」の作用や近代の国際関係の特質から劇的な影響力をもつことになる。

第4に，アイデンティティー・ポリティックスが，唯一の平和・保護共同体としての国家が互いに対立する局面で劇的な影響力をもつとしても，近代の国際関係は潜在的にはともかく現実にホッブス的アナーキーにあるわけではない。「第Ⅰ部　リヴァイアサンと市民社会」の「§8．国際システムと国際社会」で述べたように，ある歴史的段階での共通価値・利益を擁護する規則体系や制度，さらに国際公共財の供給を含めて国際的調整機構を確立・維持する構想力・意志・能力を有するヘゲモンが地域的あるいは国際関係一般にわたる社会的関係，ある意味でのグロティウス的関係を構築するからである。言い換えれば，国際的に普遍的，あるいは少なくとも一定の範囲で共通の価値・利益が存在し，それが秩序の中で維持されている限りでは国家同士は剥き出しのホッブス的関係に入るわけではないのである。このことは，逆に言えば，グロティウス的国際社会が動揺し，ホッブス的国際関係が前面に立つときにアイデンティティー・ポリティックスが噴出する条件が生まれることを指示している。

19世紀後半のナショナリズムの展開は，明らかにハプスブルク帝国とトルコ帝国がかつて作り上げた国際的社会の動揺に，20世紀初頭のそれはパックス・ブリタニカの衰退と挑戦者としてのドイツの台頭に，大戦間のそれはヴェルサイユ体制の欠点と確固たるヘゲモニー確立の失敗に，そして現代のそれは冷戦体制の崩壊に関連している。また，地域的紛争は地域に適切な副次的国際社会が欠如していること，したがって関連諸国がホッブス的勢力関係に陥っていることに関連している。

国際社会の動揺は，ナショナル・インタレストによる対立が剥き出しとなり，ナショナリズムによる国内対立の国際対立への転化を抑制しえない状況をもたらすが，同時に，それがナショナリズムの特質である反国際主義と結合しやす

いことにも留意するべきであろう。ナチス・ドイツや「超国家主義」は，既存の列強による国際秩序への挑戦という側面をもったが，それだけに国際連盟に対する批判，種々の国際主義への批判を本質的に含んでいた。

無論，ここで国際社会が理想郷であるとか，あるいはヘゲモニーや大国の利益にかかわらない秩序であると言うつもりはない。ただ，ヘゲモニーを握る国が適切な共通価値や規則，制度を維持し，国際公共財を供給する構想力・意志・能力を欠く場合に，それへの反発としてのナショナリズムが容易に生成することを理解しなければならない。どの国のナショナリズムといえども，実はナショナル・インタレストを追求する現実性が存在する。中東産油国や中国がアイデンティティー・ポリティックスを行う場合とそうでない場合を考えればよいであろう。

このようにナショナリズムあるいはナショナルなアイデンティティー・ポリティックス形成の諸契機を考察するならば，ヘルダー的な意味をもつネイション概念に立脚するアイデンティティー・ポリティックスが深く近代社会に根ざしていることが明らかとなる。ナショナリズムが原基的な特徴を脱ぎ捨てて，あるいは脱がないまでも別の衣を纏うのは，近代からの逸脱ではなく，近代に内在してのことであったと言わなければならない。

ナショナリズムの位置

冷戦終焉後のナショナリズムやアイデンティティー・ポリティックスの展開は，「文明の衝突」を思わせるかのようである。確かに，多くのエスニックな集団やネイションは，たといどのような変化・変容を遂げるにしても固有の歴史的時間の中で，固有の文化を発展させる。一定のシンボル体系に基づくエスニックあるいはナショナル・アイデンティティーは，ある時点のあるエスニック集団やネイションに神話・価値・歴史的記憶・文化などを共有する共同体の存在を意識させる。ステイトとしての主権的領域国家は，種々の「ネイション」を包括する帝国でも，またポリスでもない中間の，しかしながら大小様々な規模の，種々の歴史的・文化的・制度的相違によって特徴付けられる国民国家（nation-state）として実存するが，普遍的支配・統治システムとしての国家も，それに相対する国民的政治社会ならびに経済社会も，またそれらに基づく国際関係もナショナル・アイデンティティーとナショナリズムを再生産する構造的特質をもっている。そして，アイデンティティー・ポリティックスは，さらにアイデンティティー・ポリティックスをスパイラルに生み出す可能性を秘めている。こうしたことから明らかになるのは，ナショナル・アイデンティティーに基礎を置くナショナリズムが近代的性格をもつとともに，決して経過的に終わることのないイデオロギーとして作用することを物語っている。

では，ナショナリズムによるアイデンティティー・ポリティックスの暴発は防ぎようのない宿命なのであろうか。この問題は，別に言い換えることが可能である。つまり，ヘルダーが着目したネイションの「個性」を承認することは政治社会の普遍性や社会の「進歩」の否定にしか行きつくことがないのであろうか，と。

そうではない。何よりもナショナリズムが極めて曖昧なイデオロギー，特定の思想的内容を欠いたイデオロギーであり，ネイションの独立・統一と栄光という目標が満たされる限り種々の普遍的イデオロギーと結合して思想的内容を獲得するという特性をもつことを看過してはならない。ネイションの神話が世俗的宗教として１つのコスモスを形成することはあるにしても，その支配力には限界が存在する。

しかも，かつての「帝国」や「王国」などがとった種々の支配・統治システムは，権力の集中と系列化を特徴とするステイトという形態に移行し，それと向き合う政治社会は，何らかの形態での人民の自由，自然権を承認して種々の形態の民主主義を選択するようになり，市場に

基礎を置く経済社会システムはステイトとしての国家の機能とも関連して国民的規模での社会の統合を進めてきた。古典主義からロマン主義，さらに自然主義へといった文化的思潮の変転を「進歩」や「普遍」の具現化過程とみることはできないにしても，社会は人間の合目的的活動の可能性を拡大し，それに対応して社会システムを変化させてきた。その意味で，啓蒙思想なり「近代合理主義」が掲げた「普遍」と「進歩」は容易に否定できない。

ナショナリズム自体，ステイトとしての国家の登場とその普遍化や国民の自由に基づく政治の形成に基礎を置いていることがその証となる。パレスチナのナショナリズムは，パレスチナ人の政治的覚醒と国際環境の変化によってはじめて生まれたのであり，決して古来のパレスチナ・アイデンティティーに基づくとは言えない。それは，単にイスラエルによって奪取されたネイションとしての郷土である古来の土地を取り返す目的よりも，人民が自己の自由に基づいて政治社会を構成するのが自然であるという意識が支配的となった結果として生まれたに他ならない。つまり，普遍的価値としての人権や政治的自由に向かう歴史の中にナショナリズムの台頭もある。無論，そうであるからこそナショナリズムは容易に近代が克服しえない思想と運動であるとも言えるのだが，ヘルダー的なナショナリズムの普遍化には明らかに限界が存在する。

諸国民間を考えてもそうである。適切な共通価値・理念そして共通の利益に基づく規則体系や制度が構築され，国際公共財が提供される場合には国際主義はナショナル・インタレストを擁護するものとなる。19 世紀から 20 世紀の前半にあれほどの死を伴って戦争を戦い抜いたフランスとドイツを中軸に欧州石炭鉄鋼共同体（ECSC）が生まれ，それが欧州経済共同体（EEC）に，さらに欧州共同体（EC）を経て欧州連合（EU）の設立に至ったことを忘れてはならない。ヨーロッパ統合は一面では国民国家の力能を削り取ったが，米ソに挟まれたヨーロッパ諸国のナショナルな利益を擁護するものでもあった。そして，統合に依存するヨーロッパの副次的国際社会が形成される中で，かつてイギリスで軽蔑され排除されたアイルランド人はある場合にはイギリス人の官僚や会社員を部下としてもつようにさえなっている。

また，たといグローバル化が叫ばれ，自由市場が理念的に追求されたとしても，かつてのような「ジャングルの法則」がよいとは誰も考えないであろう。経済紛争解決のルール化が図られ，適切な保護の必要性は承認されるーもっともどのような保護が適切かについては議論が絶えないが。政治的紛争にあっても戦争は今日では正当な紛争解決手段とは見なされない。確かに第 2 次大戦後もあまりに多くの人命が戦闘行為によって失われてはいるが，国際システムの中心での戦争は回避されてきた。また，戦争にあたって，国際システムなり国際社会の中での正当化は，開始と継続に必要な条件ともなってきた。最早，国家理性にしたがってステイトとしての国家が自由に戦争をなしうる状況は許されなくなっている。

しかも，少数のエスニック集団が「国民国家」の中で複数のナショナル･アイデンティティーをもつ場合も少なくない。スコットランド人は，自らをイギリス人（British）であるとともにスコットランド人であると考え，ケベックの住民はカナダ人であるとともにフランス語系カナダ人（Francophone）であると自己を認識する。少数エスニック集団が独立か従属かという二者択一的に考えない場合はいくらでも存在する。分離主義運動はそう容易に成功するわけではない。そのような場合には，規模もさることながら，帰属するネイションのアイデンティティーをエスニック集団が共有しうるようなシンボル体系と一定の自治が存在する。そのようなシンボル体系が特定のエスニック・シンボルを超えるものでなければならないことは言うまでもない。このことは，歴史的発展の中で，種々のエスニックな集団がそれぞれ独自のシンボル体系

を超えるシンボル体系なり，それぞれのシンボル体系に基づく相互対立を抑止する機能をもつ文化や政治的価値を生み出してきたことを意味する。無論，そこに至る過程には国家によるエスノナショナリズムの抑圧もあったに違いないが，今日ではそうした抑圧なしに種々のエスニック集団を１つのネイションに統合しうるようになったことも確かである。

近代合理主義，そして啓蒙思想の延長上の思想や社会的組織原理などに「近代の行き詰まり」や矛盾･緊張が確かにあるにしても，それに対する批判は当の近代の理性の中から生まれてきた。ウェールズ人やスコットランド人への抑圧は，イングランドが培ってきたシンボル体系自体を否定するよりもむしろその普遍的発展の中で，つまり普通選挙権の実現や民主主義的意識の拡大，そして市場経済の発展自体と市場への国家の介入による経済社会の安定化の中で低下してきた。種々のエスニックあるいはナショナルな社会や文化，またナショナリズムが「近代の超克」を担うとは決して言えないのである。逆に，ナショナリズムが人民の自由という正統性から逃れられない限り，自由な人間の合目的的活動を追及する近代固有の人間の営みの発展の中にこそ「ナショナリズムの超克」を可能とする契機が存在する。

冷戦後の現代社会において，ステイトとネイションの運命がどのように展開するのかということに些か踏み込んでしまったが，そうした問題はまた別に論じることにしよう。ネイションとナショナリズムについての考察の最後に，ステイトとしての国家と産業的市場社会に基礎を置く近代の社会，また国際関係がコンドルセとヘルダー，「歴史の終焉」と「文明の衝突」の中間にあることを，あるいはそれら両者を本質的に内包していることを確認しておこう。言い換えれば，近代の政治はナショナル・アイデンティティーもそうであったようなヤヌスとしての特質をもつのである。そのいずれかによって現在の緊張関係を解決しうるとするのは幻想に他あるまい。（未完）

[追記]

本論文は，平成 15 年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究（C)⑵）「グローバル・エコノミーにおける世界経済管理の政治経済学的考察」，並びに 21 世紀 COE プログラム「スラブ・ユーラシア学の構築：中域圏の形成と地球化」に基づく研究成果である。

参考文献

Anderson, B. (1983), *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, Verso, London（白石 隆・白石さやか訳『想像の共同体：ナショナリズムの起源と流行』，リブロポート，1987 年）。

Berger, P. L. (1990[1967]), *The Sacred Canopy: Elements of a Sociological Theory of Religion,* Anchor Books, New York（薗田 稔訳『聖なる天蓋－神聖世界の社会学』新曜社，1979 年）。

Berlin, I. (1979-1), Nationalism, Past Neglect and Present Power, *Agaist the Current*, The Hogarth Press, London （福田歓一・河合秀和編訳『バーリン選集 1，思想と思想家』，岩波書店，1983 年）。

――― (1979-2), The Counter-Enlightenment, *do*（同上編訳『バーリン選集３，ロマン主義と政治』，岩波書店，1984 年）。

Caillois, R. (1963), *Bellone ou la pente de la guerre*, La Renaissance du livre, Bruxelles（秋枝茂夫訳『戦争論，われわれの内にひそむ女神ベローナ』法政大学出版局，1974 年）。

Carr, E.H. (1964[1939]), *The Twenty Year's Crisis : 1919-1939*, Harper & Row, Publishers, Inc., New York（井上 茂訳『危機の二十年，1919－1939』，岩波文庫）。

Condorcet, Marquis de (1970[1793-94]), *Esquisse*

d'un tableau historique des progress de l'esprit humain, Libraire Philosophique J. Vrin, Paris（渡辺 誠訳『人間精神進歩史　第一部』，岩波文庫，1951 年）。

Fichte, J. G.（1971[1808]）, Reden an die deutsche Nation, *Fichtes Werke VII. Zur Politik, Moral und Philosophie der Geschichte*, Walter de Gruyter & Co. Berlin（大津 康訳『ドイツ国民に告ぐ』，岩波文庫，1928 年）。

Fukuyama, F.（1989）, The end of history?, *The National Interest*, Summer（No. 16）。

Herder, J. G.（2004[1774]）, *Another Philosophy of History*, translated by I. D. Evrigenis and D. Pellerin, Hackett, Indianapolis（ドイツ語原題 *Auch eine Philosophie der Geschichte zur Bildung der Menscheit*）（小栗　浩・七字慶紀訳「人間性形成のための歴史哲学異説」，登張正實『世界の名著 38 巻，ヘルダー，ゲーテ』，中央公論社，1979 年）。

Hobsbawm, E. J.（1990）, *Nations and Nationalism since 1789 : Programme, myth, reality*, Cambridge University Press, Cambridge（浜林正夫・嶋田耕也・庄司 信訳『ナショナリズムの歴史と現在』，大月書店，2001 年ーただし本訳書底本は 1992 年の第 2 版）。

―――――― & Ranger, T.（1983）, *The Invention of Tradition*, Cambridge, Cambridge University Press（前川啓治・梶原景昭ほか訳『創られた伝統』，紀伊国屋書店，1992 年）。

Huntington, S. P.（1993）, The clash of civilizations?, *Foreign Affairs*, Vol. 72, No. 3.（1996）, *The Clash of Civilizations and the Remaking of World Order*, Simon & Schuster, New York（鈴木主税訳『文明の衝突』集英社，1998 年）。.

Kaldor, M.（2001[1999]）, *New and Old Wars; Organized Violence in a Global Era*, Polity, Cambridge（山本武彦・渡部正樹訳『新戦争論』岩波書店，2003 年）。

Kaufman, S. J.（2001）, *Modern Hatreds : The Symbolic Politics of Ethnic War*, Cornell University press, Ithaca.

Kohn, H.（1944）, *The Idea of Nationalism*, Macmillan, New York.

Mosse, G. L.（1975）, *The Nationalization of the Masses ; Political Symbolism and Mass Movements in Germany from the Napoleonic Wars through the Third Reich*, Howard Fertig, New York（佐藤卓巳・佐藤八寿子訳『大衆の国民化，ナチズムに至る政治シンボルと大衆文化』柏書房，1994 年）。

Ruoff, K. J.（2001）, *The People's Emperor; Democracy and the Japanese Monarchy, 1945-1995,* Harvard East Asian Monographs, *Cambridge*（*USA*）（高橋紘監修，木村剛久・福島睦男訳『国民の天皇，戦後日本の民主主義と天皇制』共同通信社，2003 年）。

Sieyes, E.（1789）, *Qu'est-ce que le Tiers état?*, Document électronique, Centre National de la Recherche Scientfique, http://galica.bnf.fr/Fonds_Textes/T0089685.html, August 26, 2002（大岩誠訳『第三階級とは何か』，岩波文庫，1950 年）。

Smith, A. D.（1986）, *The Ethnic Origins of Nations,* Blackwell, Oxford（巣山靖司・高城和義訳『ネイションとエスニシティ』，名古屋大学出版会，1999 年）。

―――――― （1999）*Myths and Memories of the Nation*, Oxford University Press, Oxford.

―――――― & Hutchinson, J.（2000）, *Nationalism : Critical Concepts in Political Science*, Vol. I-V, Routledge, London.

井上 俊・上野千鶴子・大澤真幸・見田宗介・吉見俊哉（1996）「民族・国家・エスニシティ」『岩波講座 現代社会学 24』，岩波書店。

小熊英二（1998）『「日本人」の境界』，新曜社。

コナー（Connor），W.（1995）エスノナショナリズム（Ethnonationalism : The Quest for Understanding , 石川一雄訳），『思想』，No. 850（1995 年第 4 号），岩波書店。

佐々木隆生（1986）「戦後国際経済関係再編成と

「国際協力」－戦後国際経済再編成の基本論理⑵」，『經濟學研究』，第 35 巻，第 3 号，北海道大学。
佐々木隆生 （1987）「戦後国際経済の政治経済学」藤田 勇編『権威的秩序と国家』（第 3 章),東京大学出版会。
高木惣吉（1949）『太平洋海戦史』，岩波新書。
千早正隆（1995[1982]）『日本海軍の戦略的発想』，中公文庫。
津田左右吉（1947）『日本上代史の研究』，岩波書店。
西川長夫・松宮秀治（1995）『幕末・明治期の国民国家形成と文化変容』，新曜社。
橋川文三（1994[1968]）『ナショナリズム』，紀伊国屋書店。
――――（1964）「昭和超国家主義の諸相」橋川文三編『現代日本思想体系 31，超国家主義』，筑摩書房。
古矢 旬（2002）『アメリカニズム－「普遍国家」のナショナリズム』，東京大学出版会。
松島栄一（1976）『明治文学全集，78，明治史論集（二）』，筑摩書房。
丸山真男（1995[1946]）「超国家主義の論理と心理」『丸山真男集 第 3 巻』，岩波書店。
――――（1995[1957]）「ナショナリズム・軍国主義・ファシズム」『丸山真男集 第 6 巻』，岩波書店。
――――（1996[1957]）「思想と政治」『丸山真男集 第 7 巻』，岩波書店。
――――（1995[1964]）「戦前における日本の右翼運動」『丸山真男集 第 9 巻』，岩波書店。
安丸良夫（1992）『近代天皇像の形成』，岩波書店。
吉田 満（1974[1949]）「戦艦大和ノ最期」『鎮魂戦艦大和』，講談社。